

式典祝辞

日本学術会議会長 **黒川 清**



東京理科大学125周年おめでとうございます。この125年の歴史の重みと、先人たちの東京理科大学の基礎をつくった125年前の日本の状況を考えてみますと、今の状況よりはるかに厳しかったのです。そのときの日本の状況を考え、先人たちの情熱と多くの貢献に思いを馳せますと、これからの大きなチャレンジといっても、かなり小さく見えるでしょう。

そのころの日本は、まだ帝国大学令もできておりませんので東京帝国大学ができるのはもう少しちょっと後になりますけれども、このときにあって多くの人たちが、建物を建て、学生を指導し、次の世代の若者をつくろうという熱い想いを持って臨むことにはいろいろな苦難があったに違いありません。

最近そのような歴史を紹介した本も出ておりますが、それを見ましてもいろいろな苦勞話があったのです。さらにそれをサポートしてしてくれた人たちのことも忘れてはいけません。

この100年間で世の中はすっかり変わってしまいました。去年は世界物理年ということでしたが、ちょうど100年前にアインシュタインの五つの論文が出ました。それからすっかり世の中が変わりました。こんな大きな変わり方をするとアインシュタイン自身も考えなかったのではないかと思います。

モノを考えるとということは生まれつきあり、おそらく内にある才能が教育ということによって芽生えてくる。例えば数学の場合ですと、数と時間と空間というものを判断するのは、動

物でも持っていますけれども、内にある才能あるいは能力を、自分たちで理解し、考えてみる、表現する、分析する、そういう能力を付与することに違いありません。このようなことを統合的に見るという能力を開かせるというのが数学でありますし、また物理もそのような統合的な見方によってモノのことであり、光とは何か、モノとは何かということを考える能力を開かせるものであります。

そのようなことからいうと、125年前にこのような若い学徒たちが次の世代の若い人たちを育てようということで物理学校をつくったこの大学は立派なものです。そのときにもいろいろな困難があったときに、大きな手を差し伸べてくれた人が、この大学にも非常に関係がある山川健次郎先生であります。

山川健次郎先生は14歳のときに会津白虎隊として死ぬほどの苦難を経験された人ですが、後に黒田清隆のつてを得る機会から国費留学生で行ける機会があり、そのようなこともあって日本で正式にエール大学に入学して、エール大学を卒業した初めての人です。それは明治維新の後ですが、この人は日本と向こうの違いは科学の教育の違いだということを確認いたしました。日本で初めてエール大学で物理を修めて帰ってまいります。そのときに、国費留学生とはいっても5年いまして途中で国のお金が切られることがありました。そんな折に、地元のご婦人が授業料を肩がわりしてくれ、あなたは自分の国に帰ったら必ず人を育てることに献身

しなさいということで約束して1876年に帰ってまいります。そのときはまだ東大はありませんが、その前身になる物理学校で先生として仕事をされました。

山川先生が自分でつくった和紙に筆で書いている物理の教科書があります。これを今度アーカイブ授業として皆さんのためにもっと広めようと思っておりますが、それを見ると墨ですけれども赤いペンも入りまして、本当に感動します。そういうことをされた方々の上に私たちがいるんだということを忘れないということが大事なことだと思います。

山川先生は、また6代の東大総長になりますが、一生を教育に捧げた方であり、東大にしかないいろいろな実験の器具を理科大学の前身の物理学校の学生にも使わせることを、普通だと規則でできないなんていうことを、あの人は思いきってやるという方でした。

そういうことがあって、この理科大学は今のように花が咲き、多くの卒業生が日本の社会で、また世界へ出て活躍されてきました。多くの先輩の大きな人たちの肩の上で、私たちは今、次の世代を育てようとしているわけです。

今、日本ではいろいろなことが言われていますし、第3次の科学技術基本計画も出ていますし、イノベーションとか経済の活性化、科学技術への投資ということが言われていますけれども、しかしどんなに投資をしても、何をしても、それは人間であります。私は常に言っていますが、イノベーションというのはモノづくりではありません。イノベティブなマインドを持った人をつくるのがイノベーションの根本です。10年すれば今の10歳の子供は20歳（はたち）になるということを考えれば、教育の改革と言いますか、人の潜在的な能力を発揮させるのかというのは一番の国家の根幹だということです。

去年の4月に日本学術会議は『日本の科学技術政策の要諦』という報告を出しました(www.scj.go.jp)。小さい本ですけれども、大

きな政策のフレームを提示したつもりです。そこにいろいろ書いてありますけれども、2050年に向かった日本の国家のビジョンは「品格ある国家」と「アジアの信頼」ということです。さらに、これから50年の間に日本を囲む状況、世界の状況はと申しますとまず人口の増加があり、今の64億から90億になります。また地球の環境、エネルギー、食糧、水、そういうところでアジアの日本はどのような国になりたいのかということを経済が見ているということとをどれだけ意識して日本の政策をつくり、教育をし、人材の育成に力を注いでいるかという視点がない限り、いくら投資しても、日本という国を外で見たときにどのような国になっているのだろうかということが心配だということでもあります。

したがって、どんな科学技術の投資をしても、政策を出しても、国家の根幹は人づくりということが大事です。会社人間、組織人間をつくるわけではなくて、このような世界の状況をどれだけ認識して一人一人が考え、行動をするという「個」の人間をつくることこそ国家の要諦であるということです。

そういうことから考えますと、この125年というのは大きな節目ではありますが、私たちが多くの人たちの過去の貢献によってここまで来たということを振り返りながら、教育の場は、「教え育てる」でなければならないと考えることです。これからの将来を担う人たちそれぞれの才能をいかに伸ばして、どのような社会を作るのか、やはりアジアにおける日本、あるいは世界における日本に、どのような一人一人の能力が開発できるだろうかということが、特に教育機関にある一人一人の責任だろうと思います。125年前の歴史を振り返って、これからの125年を大きく描くような人材が一人でも出ることを期待して、125年目の節目に私のあいさつにかえさせていただきます。今日はおめでとうございました。